

13. 臼歯咬合面のレジン充填に関する臨床的考察

○二木 昌人、広田 和子、中田 稔

(九大・歯・小児歯)

近年の接着性コンポジットレジンの目覚ましい発展によって、乳歯、永久歯を問わず、臼歯部齧蝕に対してコンポジットレジン修復が適用される頻度が増加してきているようである。臼歯部でも、とくに咬合面においては咀嚼・咬合による外力が加わるため、耐摩耗性や圧縮強度をはじめとする諸物性の優れた材料が要求される。これに対しては、最近臼歯修復用コンポジットレジンも多く登場してきており、基礎的および臨床的研究においても、従来型のものと比較して良好な結果が得られている。ところが、このように材料自体についての発展が大きい反面、窩洞形成法・充填法・研磨法などについては、アマルガム充填のような一定の方法が確立されていないのが現状であると考えられる。

そこで、演者らは、臼歯咬合面のレジン充填に適した窩洞形態を検討するために、抜去乳歯を用いてサーマルサイクリングテスト・衝突試験等を行なって辺縁封鎖性を調査したところ、ラウンドベベルが最も良好であるという結果を得た。そこで、まずこれらの基礎的研究の結果を概説したい。次に、この結果に基づいて現在行なっている臨床術式について説明し考察する。つまり、ラウンドベベルを付与する窩洞形成法を中心として、光重合型臼歯修復用コンポジットレジンとレジン用充填器具を使用した充填法などを含めて、一連の臨床術式を示し検討を加える。

さらに、最近裏層専用材としてのガラスイオノマー系のセメントが数多く発売されるにいたっているが、これらを臼歯部においていわゆるサンドイッチテクニックとして応用することは、歯髄保護のみでなく咀嚼・咬合力に対する耐久性という面からも有効な方法と考えられる。この点については、現在のところ、繰り返し荷重の影響について調査しているので併せて検討したい。